

二〇二四年度

帰国生入試 問題（国語）

注 意 書 き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

「、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「あれ？」

クラスメートの木村さんが弁当をしげしげとのぞくので、芽以は怪訝な気持ちで顔を上げた。木村さんとは休み時間にとどき雑談くらいはするが、特別仲がいいわけではない。

「え、何？」

あ、ちよつと待って、と言いながら、木村さんはスマートフォンの液晶画面をスクロールしている。

「あー、やつばそうだ、ぜったいこれだよー！ だってだって、弁当箱おんなじだし、その果物入ってるタッパーも同じだし！」

木村さんが画面を芽以の前に差し出した。そこにはお弁当の画像があった。楕円の曲げわっぱに、半分は色とりどりのおかず、半分は白いご飯。ご飯の真ん中に梅干しが一つ鎮座している。おかずは唐揚げと卵焼きと茹でたブロッコリーとミニトマト。別の小さいタッパーにパイナップルが入っている。なんのへんてつもない弁当である。

だが、それを見た瞬間、芽以は青ざめた。まぎれもなく、父親が自分のためにいつか作ってくれた弁当だったのだ。

「何、これ……」

芽以は声を絞り出すと、木村さんの手からスマートフォンを奪い取り、その写真が掲載されているブログを、ぐんぐんスクロールしていった。

次から次へと、自分がかつて食べたお弁当が現れる。記憶の底で溶けて消えかかっていたそれらが、まざまざと蘇ってくる。

まぎれもなく、自分の弁当だ、と芽以は思った。お父さんが毎朝作って自分に渡してくれた、弁当。

「私のだ……」

芽以がつぶやくと、木村さんの目が輝いた。

「でしょう？ やつば、星崎さんのだよね！ わー、すごい！ 本人目の前にいたんじゃない！ てか、星崎さん、これ知

らなかったの？」

「……知らなかった」

芽以がぼつりと答えた小さな声にかぶせるように、え、なになに、見せてー、と女子たちがまわりに集まってきた。

「これ、けっこう人気なんだよ、一回、ネットニュースにもなって。だから知ってて、ずっと追いかけてただけだよ」

ブログのタイトルは「愛娘のための今日もがんばる親父弁当」だった。シングルファーザーの「親父」ががんばって作る、というコンセプトで、娘のための毎日の弁当を披露している。キャラ弁のような派手さはないが、素材で親しみやすく、思春期の娘のための弁当を父親が作っているという点で注目を浴び、じわじわとファンが増えているらしい。

今日の半熟卵は水から火にかけてきっかり8分！ 〆ごま油が茄子を甘くしてくれる〆といった役立つ一言コメントも人気を後押ししているようだ。

「これ、星崎さんのお父さんのブログだったんだ!？」

「お父さんが作るってえらくない？ うちのお父さんなんて、林檎の皮も剥けないんだよ」

「いいなあ、おいしそう」

「すごいちゃんとしている。星崎さん、愛されてる」

自分の平凡な弁当に突然クラス中の注目が集まり、芽以は大いに戸惑ったが、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「星崎さんのお父さん、ずっとシングルファーザーでがんばってるんだ……」

誰かがぼつりとつぶやいたセリフが、騒いでいたクラスメートたちを一瞬にして、しん、とさせた。ブログのタイトルの中には、「娘が一歳二ヶ月のとき、妻は虹の橋を渡りました。妻が空で安心できるように、親父は今日もがんばります！」という文章が添えられていた。

「芽以の家、そうだったんだ……」

同じ卓球部で仲良くしている未奈美がしんみりした声で言った。

「あ、うん、そう」

芽以は答えながら、食べていた弁当の蓋をぱたりと閉じた。

「別に、秘密にしてたってわけじゃないよ。でも、わざわざさ、言う必要もなかなーって、ははは」
 ないかなーのところで身体を斜めに傾けて、ポップに答えて笑ってみせたつもりだったが、誰も笑わなかった。芽以は、脇の下に変な汗が滲むのを感じた。

父親が毎日食事を作ってくれることは、物心ついてからずっとそうだったので、特別だと思ったことはない。高校一年の今のクラスメートには、自分の家が父子家庭であることは特に伝えていなかった。

母親が幼い子どもを残して死んでしまったことを知っている人たちの間で、微妙な気遣いのような空気が生まれる。それは、芽以をいつも憂鬱な気分にした。母親が死んでしまったかわいそうな子ども、という認識のもたらす、なんとなく腫れ物にさわるような重い空気とよそよそしさ。あるいは逆に生まれる妙ななれなれしさ。そして、遠くで自分を指さしながら言われる、「あの子、お母さん死んじゃったんだって、かわいそう」というささやき。聞きたくもないのに、なぜかそのセリフは、すぐそばでささやかれたように無遠慮に耳にのびこんできて、胸に刺さった。「かわいそう」という言葉は、その言葉をはつきりと理解することができなかった頃から、芽以は雨のように浴びてきた。正確な意味は分からなくても、自分が特別扱いされている居心地の悪さは感じていた。

こっちが子どもで言い返せないからって、なんでも言っていいたいと思うんじゃないよ、と、その頃のまわりの大人たちの様子を思い出しては、芽以は腹を立てていた。保育園でも、小学校でも、中学校でも、「あの子のお母さん、死んじゃったんだって」がつきまとい続けることに心底うんざりしていた。だから、地元の子が誰も行かないような少し遠くの高校に進学したのだ。自分のことを誰も知らない場所に身を置くことができ、芽以は心からほっとした。こちらから口に出さない限り、誰も親のことなど話題にしない。自分は、ありきたりの、どこにでもいる、「まあまあ」な女子高生でいることができるのだ。そのことが、何より安らぎになった。

なのに、今、それが崩れた。父親の、弁当プログラのせいだ。ふっと足元が揺らぐような感覚に襲われた。

自分が話題の発端を作って気まずい空気にさせてしまったことに責任を感じたのか、木村さんが「ま、まあ、あれだよなえ」と高めの声を出した。

「照れくさいとは思うけどさ、星崎さんもうれしいよね、こんだけ愛されてるのがわか……」

「こんなの！」

木村さんの言葉を断ち切るように、芽以は大きな声を出した。

「うれしくない！ 迷惑なだけ！」

自分でも、言っただけじゃないことを言ってる、と思った。でも、止まらなかった。

「こんなの、どこがすごいのか？ 全部、全部別に、普通じゃん、普通の弁当じゃん。これ、お母さんが作ったお弁当だったら、誰もなんにも言わないよね。なんで父親が作ると、みんなおもしろがるのか？ すごいってなるのか？ お母さんが死んでるから？ ねえ、なんで？」

「芽以、やめなよ！」

未奈美が芽以の肩に手を置いてその言葉を遮った。芽以は、はっと我に返った。

ごめん、と誰にも聞こえないような小さな声で芽以はつぶやいてから、机の上の弁当箱を乱暴につかんでリュックサックに投げ入れた。そしてリュックサックのストラップを片方だけ引っかけて、教室を飛び出した。未奈美が何か言いながら追いかけてくるのを振り切って、全速力で階段を駆け下りていった。

帰宅した父親が、わっ、と声をあげたので、ダイニングテーブルに制服姿のまま突っ伏していた芽以は、顔を上げた。

「なんだ、もう帰ってたのか」

そんなところで電気も点けないで、と言いながら、父親がダイニングルームの電灯を点けた。

「今日は部活なかったってこと？」

「部活は、休んだ」

芽以は沈んだ声で言った。

「休んだって……どうした、具合でも悪いのか？」

「具合……悪い」

「え、大丈夫か？ なら、着替えて横になったらどうだ？」

「具合悪いのは、身体じゃない」

「身体じゃない……って、あ」

父親の表情が変わったのに気づいて、芽以は思わず目をそらした。

「何が、あつたんだ？」

父親は、やさしく話しかけながらポケットからハンカチを取り出した。紺色のおじさんハンカチが目の前に迫ってくる。自分の濡れている頬をハンカチで拭おうとしているのだ、ととっさに察知した芽以は、ぼしっと父親の手をはね返した。反動で父親はハンカチを取り落とした。

「え、なん……で？」

父親は目を見開いた。芽以はテーブルに伏せていたスマートフォンを持ち上げ、驚いた顔のまま固まっている父親に液晶画面を向けた。

「これ」

「え……あ……！」

「だよね」

「やあ、ばれちゃったかあ」

父親の顔に照れ笑いのようなものが浮かんだのを見て、芽以の胸にもやっとした苛立ちが生まれた。が、父親の方も敏感に芽以の心の動きを感じ取り、すぐに真顔になった。

「今、泣いてたのって、もしかして……これのことなのか？」

「……」

「ブログに、弁当のことを上げたから、怒ってるのか？」

「……お弁当は……」

「ごめん、悪かった、勝手に……」

7 芽以はうつむいて首を横にふるふると振った。

「お弁当は、ありがたいと思ってる。ほんとに感謝してる」

そう言いながら父親を見上げた芽以は、また涙が込み上げてくるのを感じた。

「でも、嫌だった……」

ほろほろと涙がこぼれた。

「学校で、嫌なこと言われたのか」

「……違う」

芽以は、手でごしごしと顔をこすった。

「嫌なことなんて、別に言われてない。みんな、やさしかった。すごいって言ってくれた。おいしそうって」

「そ、そっか……。じゃ、なんで……」

「すごいよ、お父さんは、すごいよ、ほんとすごいって、私も思う。わかってる」

「うん、実はな、父さんも、自分はすごい、がんばってるって思ってた。でも、そう思われるようなことをわざわざアピールするってどうだろう、ってことだよな。いや、これでも、人に褒められると、がんばれる気がしてたんだけど、そうだな、やっぱ、弁当もプライバシーの一つだからな、勝手に載せてたのは、悪かった。ほんと悪かったよ」

「謝らないですよ」

「え？」

「悪かったって、言わないで」

「う……」

「悪かった」を封じ込められた父親が、言葉につまった。芽以は、父親を追い詰めてしまったような気がして、胸がちくりとした。

「そんなこと言われても、だよね。でも、お父さんに謝ってほしいわけじゃない。謝られても、私、困る」

「困る……？」

「今日、お弁当食べてるときに、あのブログと同じ弁当だったことを言われて、だから、うちがお母さんのいない家だって

こともわかって、それがなんか私、すごく嫌だなんて思って、学校を飛び出して帰ってきちゃったから、みんな心配してLINEとかくれて、謝ってきてみたい。それが、辛い。別にクラスの子だれも悪くないし。私が一人で怒って、空気悪くしただけだし。だからもう、LINE見るの怖い。さつきからずっと開けない。そしたらなんか、泣けてきた。何これ。なんなのこれ。もうなんだかよくわかんないよ、わかんなくて、笑える」

芽以は涙を流しながら、ははは、と空々しい笑い声を漏らした。

「つまり、その、あれだ。とにかく、特別扱いしてほしくないってことだな」

芽以は父親の言葉に、はっとしたように目を見開き、こくりと頷いた。

「そう。誰にも、私のこと特別だと思ってほしくなかった。だって、だって普通のことだもん、私にとっては、全部」⁸
「そう言いながら、涙がすうつと引いてくるのを、芽以は感じた。」

「じゃあ、どうしたらいいんだろうな」

「うん……」

「芽以の普通が、他の子たちにとっては、ちょっとだけ普通じゃないんだ。でも、芽以が自分の普通を理解してほしいなら、その子たちの普通を、芽以も理解してあげなくちゃいけないんじゃないかな。それぞれの『普通』が同じじゃないから、それぞれが素敵に見えるっていうのも、あるだろうしさ」

「……うん。やっぱ……お父さん、すごい」

「いや、まあ、長いこと大人やってるからな」

「お父さんがシングルファーザーになったのって、何歳？」

「二十七歳だね」

「若っ」

「若かった。でもさ、お母さんが命がけで残してくれた芽以は、めちゃくちゃかわいかったから、思い切りがんばれたよ。」

若いからこそがんばれたのかもしれない。芽以のためにしてあげたいことを覚えるのは、実はすごく楽しかった。料理とか、化学実験と同じだなんて思ってさ。ほら、もともと理系だからさ。料理とか家事とか、実験みたいなものだよ。ブログで実験

の成果を自慢してるだけ。その意味では、芽以が言うみたいに普通の人と同じ」⁹
「うん」

「でもあれだな、シングルファーザーという付加価値を付けて同情を引いたうえで自慢っていうのが、嫌な感じだよな、考えてみれば」

「だけど、よく考えてみれば、それはほんとのことだから、堂々としていいんだよ。そうだよ。なんでこれまで私、堂々とできなかったんだろ。こうやってお父さんと二人でちゃんと生きてること、すごい自慢なのに」

「そうだ、自慢しよう、堂々と、普通に」

「うん、普通に……。って、なんだろ、普通って、バカみたい……。もういいよ、お父さん」

「もういい？」

「もう、がんばらなくてもいいよ、私のために」

「え……？」

「って、私が思うことにする。ずっとお父さんは私のためにがんばってくれてるんだって思ってきた、その私の気持ち息苦しかったってこと。みんなが自分のために気を遣ってくれてるって思ってしまう自意識過剰な気持ちがかかったってこと」

「ほう、なるほど」

「だからいいよ、ブログ、続けなよ。私、お父さんのこと、承認欲求高めの蘊蓄好きな自慢おじさんって、気楽に思うことにするから」

「ずいぶんな言われようだなあ。よし、そうとなったらこれからも遠慮なくウザめにやらせてもらうことにする。さて、今日は、明日の弁当のおかずにも使える鶏そぼろをこれから作るんだが、よりきめの細かいそぼろを作るには、弱火でじっくり炒めるのが肝心なんだ。何しろ肉のたんぱく質は五十度くらいで固まりはじめるからな」

「わかった、今日は私もそれ手伝う！ でもその前に、制服、着替えます！」

¹⁰ 芽以は元気よく片手を上げた。

問一 —— 線部 1 「それを見た瞬間、芽以は青ざめた」とあるが、なぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 木村さんのスマートフォンに自分の弁当の写真がなぜ映っているのかわからなかったから。
イ 自分の父親が、自分の許可なく弁当の画像をブログに上げていることがわかったから。

ウ 木村さんが見せてきたのは、今まさに自分が食べようとしている弁当の画像だったから。

エ 父親が愛情を込めて作った特別な弁当が、勝手に撮影さつえいされていたことに気づいたから。

問二 —— 線部 2 「木村さんの目が輝いた」とあるが、なぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ずっと注目していた人気ブログを書いている人が、自分の目の前にいる人だとわかったから。

イ 娘のためにがんばって弁当を作っているのが、自分の同級生の父親だとわかり感動したから。

ウ 自分が、芽以本人も知らなかった芽以の弁当の画像が上げられているブログを見つけたから。

エ 自分が気づいた通り、人気のブログで披露されている弁当がクラスメートのものだったから。

問三 —— 線部 3 「未奈美がしんみりした声で言った」とあるが、この時の未奈美の心情を説明したものとして最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア 母親がおらず、ずっと苦勞してきた芽以の家庭の事情を、仲の良い自分に打ち明けてくれなかったことを悲しく思っている。

イ 母親のいない愛娘のために、毎日がんばって弁当を作り続けている芽以の父親の深い愛情にふれて、胸を強く打たれている。

ウ 幼い時に母親を亡くしてからずっと、芽以が父親と二人きりで暮らしてきたことを初めて知り、その境遇きょうぐうに同情している。

エ 芽以の父親が亡き妻の分までがんばって作った弁当を見て、シングルファーザーの大変さをあらためて感じ、心を痛めている。

問四 —— 線部 4 「『ないかなー』のところで身体を斜めに傾けて、ポップに答えて笑ってみせた」とあるが、芽以はなぜそうしたのか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア シングルファーザーの家の子どもはみな不幸であるかのように思われなくなかったから。

イ 自分には母親がないという事実をクラスメートに重く受け止めてほしくなかったから。

ウ わざわざ言う必要もないと思っていた家庭の事情を友達に知られ照れくさくなったから。

エ 自分の家が父子家庭である事実をみんなにかくしていたことをごまかしたかったから。

問五 —— 線部 5 「ふっと足元が揺らぐような感覚に襲われた」とあるが、芽以はなぜそのような感覚に襲われたのか。その理由を説明した次の文の空らんにあてはまる表現を四〇字以上、六〇字以内で答えなさい。

父親のブログのせいで（ ）

（ ）が失われてしまうと感じたから。

問六 —— 線部6「芽以の胸にもやっとした苛立ちが生まれた」とあるが、なぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 知らぬ間に自分の弁当の写真がブログに上がっていたせいでクラスではずかしい目であったのに、まじめに取り合おうとせずにごまかしてきたから。

イ ブログに勝手に写真を上げていたことを強く非難したつもりだったのに、娘が喜んでいると考えて得意げにふるまっているように思えたから。

ウ 自分にだまってブログに写真を上げていたことがきっかけでクラスメートと気まづくなったのに、軽い反応で真剣に受け止めてもらえなかったから。

エ ブログに写真を上げる前に自分に確認をとらなかったことを怒っているのに、自分の気持ちをまったく理解していないように感じられたから。

問七 —— 線部7「芽以はうつむいて首を横にふるふると振った」とあるが、芽以はこの時なぜそうしたのか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 弁当の写真をブログに上げられたことを怒っているわけではないし、毎日自分のために弁当を作ってくれている父親のことを悪く言うつもりもないから。

イ 父親が弁当の写真を勝手にブログに上げたせいで自分の高校生活が台無しになったことは、謝られたからといってすぐに許せるような問題ではないから。

ウ シングルファーザーとしてがんばっている父親に感謝しなければいけない立場の自分が、ブログのことくらいで父親を責めてはいけないと思っっているから。

エ 自分が泣いているのは、クラスメートは誰も悪くないのに一人で怒って空気を悪くした自分のことが嫌になったからで、父親のブログは何も関係がないから。

問八 —— 線部8「涙がすうっと引いてくるのを、芽以は感じた」とあるが、なぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 今までかくしてきた特別扱いされたくないという自分の思いを父親が受け止めてくれたことで、落ち着きを取りもどせたから。

イ 弁当のブログをやめてほしいという自分の願いに父親が気づいてくれたことで、父親を信頼する気持ちがよみがえってきたから。

ウ 母親がいないことで自分がこれまで感じてきた苦しみやつらさを父親が理解してくれ、父親の愛情を強く感じることでできたから。

エ なかなか言葉にできなかった今の自分の思いを父親が言い当ててくれたことをきっかけにして、自分の気持ちが整理され始めたから。

問九 —— 線部9「芽以が言うみたいに普通の人と同じ」とあるが、父親はどういうことを言おうとしているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 毎日の弁当作りは芽以のためにがんばっているのではなく、料理が化学実験と似ていておもしろいからやっているであり、自分がシングルファーザーであるという事情は関係がないということ。

イ 父親として残された娘のために努力しているうちに、どんどん料理が上達していったことが単純にうれしくて、その成果を自慢するためにブログに弁当の写真を上げていたにすぎないということ。

ウ シングルファーザーであれば、愛する娘のためにしてあげたいことを覚える喜びは誰もが感じるものであり、その気持ちをもっとの人に伝えたいと考えるのも自分に限った話ではないということ。

エ 自分にとって料理は化学実験をするようなもので、特別な実験の成果を自慢するような感覚でブログを書いていたが、娘に弁当を作るのは父親として当たり前のことではなかったということ。

問十——線部10「芽以は元氣よく片手を上げた」とあるが、この時の芽以の心情を説明したものとして最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母親が命がけで生んでくれた自分のことを父親が心から大切に思っただけで、これからは自分は父親と二人で楽しく生きていくことができると希望を胸にいだいている。

イ 自分が教室で特別扱いされるきっかけになったのは父親がブログに弁当の写真を上げたことだったが、承認欲求が高い父親にとってそれは自分の努力の成果を自慢するという普通の行動なのだとなり、もっと気楽にとらえて父親の普通を認めていこうと思っている。

ウ 母親がいなくて知った友だちの反応も父親が自分のために弁当を作ってくれられることも、それぞれにとって普通のことをしていただけだと気づき、人それぞれ普通は違うのだから自分も自分の普通を父親と共に胸を張って生きていけばよいと前向きな気持ちになっている。

エ 自分が幼いときに母親を亡くしたことで特別扱いされるのが嫌だったのは自分が自意識過剰であったからであり、みんなは自分を思いやってくれてくれただけなのだということに気がついたので、クラスメイトへのわだかまりがなくなり晴れ晴れとしている。

二、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

1 映画やドラマを倍速で視聴する人が増えているという。ネットの動画サービスでは日々膨大な数の作品が配信されているが、ひとつひとつの作品をゆっくり観ている時間はない。それでも話題の作品は見逃したくない。倍速にしたり、興味のないシーンをスキップしたりすれば、限られた時間で多くの作品が観られる。

2 時間をかけずに効率的にポイントだけ押さえたいという欲求は、いまにはじまったことではない。昭和の時代から、速読術の本をはじめ「この一冊で〇〇がわかる」といった本は人気だった。当時すでにビデオの再生速度のコントロールはできたそうだが、画質や音質が極度に劣化した。それが現在の動画サービスでは、映像や音の乱れもなく再生速度を変えられるようになった。そうした技術の進歩が倍速視聴の広がり加速させている。

3 倍速で再生しても、せりふがなくなるわけではないし、ストーリーが変わるわけでもない。たかさんの映像に目をおさなくてはならない人にとっては、ありがたい機能だろう。

4 だが、映画やドラマはせりふとストーリーだけでできているわけではない。風景をずっと映しているシーンやせりふのないシーンもある。なにも話してなくても、その沈黙の〈間〉をとおして、登場人物の内的世界を伝えようとしている場合もある。倍速視聴は、そうした〈間〉をそぎ落としてしまう。

すると、どういうことが起きるのか。それは音楽を倍速で聴くようなものかもしれない。倍速で聴いても、演奏されている楽器の種類や歌詞の内容、曲の構成などはわかる。でも、それはもはや音楽ではない。なぜ、そういえるのか。音楽のもっとも大切な要素であるリズムが崩れてしまうからだ。

人には気に入ったリズムを感じると、自然とからだを使って同期（シンクロ）しようとする習性がある。足を踏み鳴らしたり、上体を揺らしたりするように、それはほとんど無意識にからだに起きる反応だ。その同期は、感情や心に浮かぶイメージにも及ぶ。ライブでは、観客同士がシンクロして同じ感情を共有するような現象が起きる。そうした経験は音楽の大切な要素だ。

では、映画やドラマで、そうした同期を引き起こすものはなにか。それはせりふやストーリーではなく、息遣いだったり、沈黙だったり、せりふとせりふの〈間〉だったり、風景描写だったりする。そうした〈間〉の存在が、視聴者のからだを、登場人物の内面や、作品の世界観とシンクロさせる経験を生みだす。

たとえば、ある人物が水平線の彼方を長い時間無言で見つめていて、その水平線だけが映りつづけているシーンがあるとすれば、視聴者もまた、その人物に視点を重ねて同じ時間をかけて、水平線を眺める。そうやって他者の内面を内側から経験する。

倍速視聴に慣れてしまうと、そのような〈間〉や沈黙による表現が、間延びした退屈なものに感じられるかもしれない。作品によっては、沈黙や〈間〉に、言葉にならない重要なメッセージが記されているものもある。だが、倍速で視聴する人の数が増えていけば、映画やドラマを配給する側も、倍速やスキップをしても支障のない作品を優先的に提供するようになるかもしれない。

6 倍速視聴の背景にある「むだな時間や労力をかけず、効率的にポイントだけを押さえたい」という欲求が、人と人との関係に及ぶと、どうなるだろう。

SF作家の星新一のショートショート集『ポッコちゃん』（新潮文庫、1971年）の中に『肩の上の秘書』（1961年）という話がある。セツテイは近未来。その時代にはだれもが肩に秘書代わりにロボットのインコをのせている。

このインコは自分の主人のしゃべった本音を、ケイゴ表現に直して、社交辞令やお世辞をまじえて言葉にしてくれる。同時に、相手のインコが話すまわりくどい言い回しを短く要約して伝えてくれる。人と人とは直接言葉を交わさず、それぞれのインコをおして会話するのである。

この作品の中にセールスマンと主婦がやりとりするシーンが出てくる。セールスマンがある商品を取り出し「A」とつぶやくと、インコが「きょうおうかがいしたのはほかでもございません。このたび、当社の研究部が、やっと完成いたしました新製品をお目にかけようと思ったわけでございます」などと礼儀正しいセールストークにいいかえる。

それを聞いた主婦のインコはひと言、主婦の耳で「買え、と言っています」とささやく。主婦が「いらないわ」とつぶやくと、インコが「うちでは、とてもそんなコウキユウ品をそなえるほどの余裕が、ございませんもの」といった婉曲な断り文句にいいかえる。それを聞いたセールスマンのインコは耳で「いらないそうだ」と要約する。「そこをなんとか」とセールスマンが食い下がると、インコは「でもございませうが、こんなベリンリな品はございません」とさらに熱をオびたトークを展開する。それを聞いた主婦のインコが「ぜひ買え、と言っていますよ」とささやく。主婦が「うるさいわね」というと、インコは「主人はまだ帰ってまいりませんので、いまはちょっと、きめかねるんですの」「本当に残念ですわ」という。セールスマンのインコがそれを「帰れとさ」と要約する。あきらめたセールスマンが「あばよ」というと、インコは、「さようございますか。ほんとに残念でございます」といねいな別れの挨拶を述べる。

半世紀以上に発表された作品だが、いま、こんなアプリがあったら需要がありそうだ。まわりくどい話や、まとまりのない話からむだな部分を省いて、要約して伝えてくれる。さらに、感情的にならず、相手を傷つけずに返答してくれる。人と話すのが苦手な人には役立ちそうだ。現代のAI技術を使えば実現可能だろう。

7 しかし、ロボットインコには伝えられないものもある。語られた言葉を要約しても、その中に本当に伝えたいことがあるとはかぎらないからだ。とくに、ふだんの会話では、とりとめのないむだ話をしているうちに、ふいに「私がいいたかったのは、こういうことだった」と気づくことのほうが多い。

いったい、「むだ」とはなんだろう。私たちがむだと判断してしまうものは、本当に不要なものなのだろうか。

話はとぶが、みなさんは小学校や中学校の思い出というと、どんなことを思いだすだろうか。運動会のこと、遠足や修学旅行のこと、だれかを好きになったことなど、人によって浮かんでくる思い出はさまざまだろう。だが、⁸肝心の授業の内容を細かく思いだせるだろうか。

学校は勉強を教わるところだ。だが、私の場合、授業で先生がどんな話をしてたのか、ほとんど思いだせない。覚えているのは、友だちとふざけて怒られたこととか、午後の教室にさしこむ西日のまぶしさとか、先生の着ていたジャージに継ぎがあたっていたなど、授業の内容とは関係のない、どうでもいいことばかりだ。

それらは勉強をするという学校の目的からすれば「むだ」なことともいえる。だが、そうした「むだ」によって私たちの

記憶の大半は形づくられている。だれかと会話をしても、会話の内容は数日すれば忘れてしまうかもしれない。あとになって思いだせるのは、そのときの相手の声の調子や表情、その日の天気、かかっていた音楽などの背景だったりする。

「むだ」とは、いわば効率性から外れた部分である。いいかえれば、目的からも意味からも解放された領域だ。しかし、じつは、その「むだ」こそが自分だけの人生の経験となり、固有のものの見方や感じ方を育てる。自分がたしかにそこにいて、なにかを経験したというあかしは「むだ」の中にある。

一方、効率性とは、たいていの場合、自分以外のだれかの都合に合わせるためのものだ。学校の勉強についていくため、世間に遅れをとらないため、他人に迷惑をかけないため。自分のために効率性を求めていたつもりだったのに、じつはまわりの都合に急かされていただけだった、ということもある。

人生でなにか「むだ」で、なにか「むだ」でないかは、だれにもわからない。むだだと思っていたことが、あとになって、とてもだいたいなことだったと気づくこともある。長い目で見れば、どれだけ多くのむだとつきあってきたかが、人生の豊かさにつながることもある。

(田中真知『風をとおすレッスン 人と人のあいだ』)

問一 〰〰〰線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1「映画やドラマを倍速で視聴する人が増えているという」とあるが、「倍速視聴」をするのはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 映像や音の乱れがないまま動画を倍速再生することが可能になったから。
- イ 限られた時間で映画やドラマのポイントや登場人物の内面を理解できるから。
- ウ 時間をかけることなく多くの映画やドラマを視聴することができるから。
- エ ネットの動画サービスでは膨大な数の映画やドラマを鑑賞できるから。

問三 ——線部 2「昭和の時代から」といった本は人気だった」とあるが、この一文で筆者が伝えたいことはどのようなことだと考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア インターネットがなかった昭和の時代では読書は人気があり本がよく売れていた。
- イ できるだけ短い時間でより多くのことを理解したいと考える人は以前から多くいた。
- ウ 一冊本を読んだだけでは物事の表面上の理解にとどまりその本質は理解できない。
- エ かつて速読術の本が人気だったように今では倍速視聴が広く受け入れられている。

問四 ——線部 3「倍速で再生しても、せりふがなくなるわけではないし、ストーリーが変わるわけでもない」とあるが、「倍速で再生」することの何が問題なのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア せりふが聞き取れないこと。
- イ 再生時間が短くなること。
- ウ 〈間〉がなくなること。
- エ 風景描写がそぎ落とされること。

問五 ——線部 4「すると、どういうことが起きるのか」とあるが、筆者は「どういうことが起きる」と考えているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のからだや登場人物の心情や作品世界が自然と同期していくような経験を、視聴者ができなくなる。
- イ 無意識のうちに視聴者同士がシンクロし、互いに感情やイメージを共有するような現象が起きなくなる。
- ウ 〈間〉によって表現されていた人物の内面や作品のストーリーが、視聴者に理解できないものとなる。
- エ 沈黙のシーンが視聴者に伝えようとしてきた、映画やドラマに登場する人物の内的世界が失われる。

問六 — 線部5「他者の内面を内側から経験する」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 登場人物の視点や息遣いを自分と重ねて作品に入り込み、作品に込められたメッセージを受け取ること。
- イ 水平線の彼方を無言で見つめている登場人物に視点を当てることで、その人物に感情移入していくこと。
- ウ 登場人物の心情を想像しながら描写された風景を眺め、その人物と同じように作品世界を体験すること。
- エ 映像作品の登場人物に視点を重ねて沈黙の時間を共有し、その人物と同じような感情を心にいだくこと。

問七 — 線部6「倍速視聴の背景にある「欲求」とあるが、その「欲求」は映画やドラマにどのような影響^{えいきょう}を及ぼす可能性があると筆者は考えているか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 沈黙や〈間〉がたどり返されるような退屈な作品が少なくなる。
- イ 倍速やスキップをしても視聴できる作品だけが提供されるようになる。
- ウ 視聴者のからだと作品の世界観がシンクロするような作品がなくなる。
- エ 息遣いや風景描写などに重要な意味が込められた作品が少なくなる。

問八 Aに入る適当な語句を一字で答えなさい。

問九 — 線部7「ロボットインコには伝えられないものもある」とあるが、「ロボットインコ」による要約では「伝えられないものもある」と筆者が言うのはなぜだと考えられるか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ロボットインコが話を要約する中で省いてしまう部分の中にも、話し手にとって大事なメッセージがふくまれている可能性があるから。
- イ ロボットインコは語られた言葉をただ要約して伝えるだけで、その要約が相手の本当に知りたかった内容であるとは限らないから。
- ウ ロボットインコは話し手が語った言葉を要約して伝えるが、話し手が語らなかつたことの中にこそ本当に伝えたいことがあるから。
- エ ロボットインコが機械的な判断で作った要約と話し手が伝えたいと思っていた話の要点が、必ずしも同じになるわけではないから。

問十 — 線部8「肝心の授業の内容を細かく思いだせるだろうか」とあるが、筆者はこの問いかけをきっかけにして、どのようなことを伝えようとしていると考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 学校生活においては、授業よりも運動会や遠足のほうが子どもにとって重要だということ。
- イ 私たちの記憶の多くは、どうでもいいと思われるようなものから作られているということ。
- ウ 学校で教わるものに価値はなく、目的や意味から解放されたものに価値があるということ。
- エ 幼いときの経験の中で後から思いだせるのは、むだに思えるようなことだけだということ。

問十一 — 線部9「長い目で見れば、どれだけ多くのむだとつきあってきたかが、人生の豊かさにつながることもある」とあるが、なぜか。本文全体をふまえながら一一〇字以上、一四〇字以内で答えなさい。ただし、次の言葉を必ず使って答えること。

沈黙や間 とりとめのないむだ話

二〇二四年度 帰国生入試 国語解答用紙 (1)

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

解答用紙2

合計

問一

問二

問三

問四

問 五			
			父親のブログのせいで
60	40		
が失われてしまうと感じたから。			

問六

問七

問八

問九

問十

二〇二四年度 帰国生入試 国語解答用紙(1)

受験番号

--	--

氏名

--

①	
②	
③	
④	
⑤	

◆右のらんには何も書かないこと。

解答用紙2

--

合計

--

問一

ア

問二

エ

問三

ウ

問四

イ

問 五			
られ る 生 活	して 特 別 扱	に 知 ら れ て	父親のプログラムのせいで
60 が失われてしまうと感じたから。	40 い さ れ る こ と の な い 安 ら ぎ を 感 じ	し ま っ た の で 、 母 親 の い な い 事 実 を み ん な	自 分 に 母 親 が い な い 事 実 を み ん な

問六

ウ

問七

ア

問八

エ

問九

イ

問十

ウ

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

小計

◆右のらんには何も書かないこと。

二

問 一	
d	a
便利	設定
e	b
帯	敬語
	c
	高級

問二
ウ

問三
イ

問四
ウ

問五
ア

問六
エ

問七
エ

問八
買え

問九
ア

問十
イ

問 十						
く	も	人	か	、	の	映
ま	の	生	っ	と	中	画
れ	の	に	た	り	に	や
る	見	お	こ	と	重	ド
可	方	い	と	め	要	ラ
能	や	て	が	の	な	マ
性	感	も	ふ	な	い	に
が	じ	む	く	い	メ	お
あ	方	だ	ま	む	ッ	い
る	を	の	れ	だ	ー	て
か	育	中	て	話	ジ	む
ら	て	に	い	の	が	だ
。	る	こ	た	中	ふ	に
	重	そ	り	に	く	思
	要	そ	す	本	ま	え
	な	の	る	当	れ	る
	経	人	よ	に	て	沈
	験	だ	う	言	い	黙
	が	け	に	い	た	や
140	ふ	の	、	た	り	間